

科学哲学会 第50回大会 ワークショップ

「分析哲学／現代形而上学で「人生の意味」や「死」について「語る」ことはできるのか」

オーガナイザー 蔵田伸雄(北海道大学)

提題者 久木田水生(名古屋大学)

「人生の意味についての言説はどのような言語ゲームなのか？」

鈴木生郎(鳥取大学)

「死の害を形而上学的に考えること」

---

論理実証主義(特に Ayer)が形而上学的な問題を「哲学的」議論から駆逐して以来、「人生の意味・無意味」や「死」といった「実存的」な主題は、主に大陸哲学系の哲学者によって議論される問題であり、「分析哲学的」な(自然主義的な傾向が強く、論理学を範とした言語哲学的手法を用いる)議論で問題にされる主題ではないとされてきた(ましてや「科学哲学」の問題ではない)。少なくともメタ倫理学における道徳的価値に関する議論が興隆するまで、「分析哲学」は価値に関する議論はあまり扱わない傾向にあったと言えるし、「死」や「人生の意味」に関する議論が「分析哲学」の領野から放逐されたのもこのような「分析哲学」の性格を考えれば当然であると言ってよい。

しかし、R. Taylor が「シーシュポス問題」を再提起する形で、「人生の意味」に関する主観説・客観説の区別を提起し、その後「人生の意味」に関する議論は「分析哲学的」な哲学者によって展開されている。分析哲学的な道具立てを用いて、「反出生主義」を標榜する D. Benatar は自らの編纂したアンソロジー *Life, Death, & Meaning* で Analytic Existentialism という語を用いている。また近年の「人生の意味」に関する諸文献のサーベイを通じて積極的に成果を発表し続けている T. Metz も自らの仕事を Analytic Existentialism であるとする。こういった問題圏を切り開いたのは T. Nagel や R. Nozick などの、(広義の)「分析哲学者」に分類されながらも「実存的な」問題も扱った哲学者たちであり、また従来分析哲学が問題にしなかった問題を「分析哲学的」手法でとりあげた B. Williams の業績を考慮するなら「分析実存主義」という立場もさほど奇妙なものではないかもしれない。さらに「現代形而上学」の興隆を経て現れた「死の形而上学」といった研究領域も分野として確立している。また関連する問題は Parfit 等の哲学者によっても検討されている。

そもそもウィゲンシュタインが『論理哲学論稿』の最終部で「生の意味」(倫理)を哲学的に語ることの妥当性を問題にして以来、こういった問題をどのように扱うべきかという問題意識そのものが「分析哲学」や「現代形而上学」にある種の緊張感をもたらしてきたと言

うことも可能であろう。また M. シュリックもこの分野での古典的な論文の一つとされている論文を執筆している。

しかし分析哲学と実存主義とを結び付けることに「うさん臭さ」がつきまとうことも事実である。このような動向はいわば分析哲学の「明晰さ」への志向に反するもので、実存的な問題に対して、分析哲学的方法論が本当に生産的なものでありうるのかという点では、疑いの余地もある。上記のような経緯も「分析哲学的な道具立てが増えたために、分析哲学や現代形而上学で「死」や「人生の意味」について語るができるようになった、などという単純な話ではない。「分析実存哲学」などはいわば「分析哲学」の安売りなのではないかという懸念も生じる。

また（自然）科学が「人生の意味」を問題にしない以上、「人生の意味」は当然科学哲学の問題ともならない。だが「人生の意味」という問題圏は（精神）医学や心理学と結びついた問いであるため、人生の意味に関する問いは医学的・心理学的な（近年では脳科学的な）問題ともなる。したがってこの問いは広義の科学哲学的な問いともなりうるし、P. Thagard の *The Brain and the Meaning of Life* などはこの方面での業績である。。

本ワークショップではオーガナイザーの蔵田がこういった動向について整理して問題提起をした後、この種の動向に批判的な久木田水生と、現代形而上学の枠の中で「死の形而上学」について活発な研究を続ける鈴木生郎の提題を中心に、「分析実存主義」の現状と可能性を検討してみたい。